羅針盤

渡邉　玲
Rei Watanabe
順天堂大学医学部皮膚科学講座 主任教授

乾癬：治しにいく前に

2010年に本邦で使用できるようになったTNF阻害薬，IL-12/23阻害薬を皮切りに，乾癬治療の選択肢が大幅に増え，乾癬治療はパラダイムシフトを迎えたと評されるようになりました．私が研修医のころは外用療法や紫外線療法のために入院する患者さんも多くみられましたが，近年乾癬治療はほぼ外来で完結し，疾患管理がとてもしやすくなっています．治療が途中でうまくいかなくなった場合にも，代替案を比較的簡単に提示することが可能になりました．そんななかで，飯塚一先生（旭川医科大学名誉教授）がとある講演会の際におっしゃられ，ドキッとした言葉があります．

「最近の先生たちは，すぐに治しにいっちゃうんだよね」

治しにいくことは，患者さんの症状を早く改善しようと一生懸命になった結果であり，決して悪いこととはいえないのですが，私自身には，この言葉に思い当たることが多々ありました．「ほんとに乾癬かな？」と迷うとき，診断的治療と言いつつもとりあえず広いスペクトルで炎症カスケードを抑える薬剤を選んだり，乾癬だと信じて治療を組み立てても予想外に治療反応性が悪かったり，かえって皮膚症状が増悪したときにドキドキしながらやみくもに薬剤変更を試みようとしたり．そんな場合，治療がうまくいくと，「あーよかった」と胸をなでおろすだけで，「診断は本当に乾癬でよいのだろうか」「どうしてあの治療でうまくいかなかったんだろうか」「逆にどうしてこの治療でうまくいったんだろうか」と振り返ることを忘れてしまいがちです．「すぐに治しにいった」弊害は，もちろんいずれ自分自身に返ってきますが，何よりも長期的に患者さんにとって不利益をもたらしえます．

道具がよくなったがゆえに職人魂を失いがちになることは，どの分野でもおこる事象ではありますが，私自身への自戒の念を込めて，今回機会をいただきました本号では，乾癬の病態をもう一度考え直すきっかけをつくりたいと考えました．乾癬様病態といわれる皮膚疾患を，乾癬と発症機序が似ている疾患群と，明確な区別は難しいですが，最終的な皮膚症状が似ているものの異なる機序で生じていると考えられる疾患群に分け，多くの先生方から症例をあげてご解説いただくことにしました．また，乾癬様病態を理解するうえで，病理組織学的な視点，免疫学的な視点，遺伝子学的な視点，さらに乾癬の全身疾患としての視点から，専門の先生方にご解説いただくことが叶いました．ご寄稿くださいました先生方に改めてこの場をお借りして深謝申し上げます．また，このアイデアは，私の長年の恩師である藤本学先生（大阪大学皮膚科教授）の講演からいただいたものでもあります．アイデアの借用を快くお許しくださった藤本先生にも深謝申し上げます．

本特集が，皆様の乾癬再考のきっかけとなり，理解の整理につながりましたら幸いです．